# これからの授業研究とこれからの心理学

吉

 $\mathbf{H}$ 

### 軽んじられてきた授業研究

日本全国の学校で、毎日何十万回という授業が行われている。日本全国の学校で、毎日何十万回という授業が行われている。日本全国の学校で、毎日何十万回という授業が行われている。日本全国の学校で、毎日何十万回という授業が行われている。

その理由はいろいろ考えられると思う。

アカデミックな世界での承認を求めて、どちらかといえば、よりた、軽んぜられる部門でしかなく、教育心理学研究者の多くは、の中では、授業を研究する役割を担らはずの「教育心理学」もまな研究だとみなされていたこと。そのような雰囲気にある心理学重んずるアカデミックな心理学の雰囲気の中では、粗雑で周辺的重とである。「授業」のような具体的現実の研究は、厳密な「基礎的研究」を「授業」のような具体的現実の研究は、厳密な「基礎的研究」を

「基礎的」な傾向をもつ研究に注意を奪われてしまい途方にと、そのあまりにも複雑で豊富な内容に圧倒されてしまい途方にと、そのあまりにも複雑で豊富な内容に圧倒されてしまい途方にと、そのあまりにも複雑で豊富な内容に圧倒されてしまって、たと、そのあまりにも複雑で豊富な内容に圧倒されてしまっていたこと。それる、という面もあったこと。

そういう教育実践からの心理学への期待と要請、心理学そのも

— 11 —

ろうし、また、盛んにすべきだと考えるのである。理学、ことに教育心理学において、今後ますます盛んになるであのの内容の充実、という両方の観点から考えて、授業研究は、心

## 研究者の視点と授業者の視点

る。間と授業とのかかわり方によって、その目的はさま ざ ま に 異な間と授業とのかかわり方によって、その目的はさま ざ ま に 異なでは、授業はそもそもなぜ研究されるのか。授業を研究する人

では、 を対している法則性を発見するためである。したがって、その研究が、自分の授業の質を高めるためである。したがって、その研究が、自分の授業の質を高めるためである。したがって、その研究が、自力の授業の質業者の授業をよくするのに、いつまでも何の役にも立たないはずなのである。これとは対照的に、研究を専門とする心でいる法則性を発見するためである。と普通考えられている。している法則性を発見するためである。とき通考えられている。 での考え方によれば、その研究で見出された法則性が授業をよくするために役立つことは、必須条件ではない、とされることになするために役立つことは、必須条件ではない、とされることになするために役立つことは、必須条件ではない、とされることになするために役立つことは、必須条件ではない、とされることになするために役立つことは、必須条件ではない、とされることになするために役立つことは、必須条件ではない、とされることになずるために役立つことは、必須条件ではない、とされることにない。

どうもそのままは通用しないところがあるように思われるのであないこの「実践と研究」という二分法も、授業研究においては、きたものだと考えられる。だが、他の領域では通用するかもしれことに、アカデミックな学問の発生ということによって起こってこのような基本的方向づけの違いは、専門的な分業化の発生、このような基本的方向づけの違いは、専門的な分業化の発生、

らなのではない。デミックな学問研究も社会的意義をもつべきだという理由だけかだとえば、人間をモルモットとして扱ってはいけないとか、アカる。これは、人間を対象とする研究一般にみられる倫理的な理由、

まず第一に、「授業は自然現象ではない」ということである。まず第一に、「授業は自然法則に従ってくり返し生起する現象なのまり、授業は、ある自然法則に従ってくり返し生起する現象なのまり、授業は、ある自然法則に従ってくり返し生起する現象なのまり、授業は、ある自然法則に従ってくり返し生起する現象なのまり、授業は、ある自然法則に従ってくり返し生起する現象なのまり、授業は、ある自然法則に従ってくり返し生起する現象なのまり、授業は、ある自然法則に従ってくり返し生起する現象なのまり、授業は、方法にない」ということである。まず第一に、「授業は自然現象ではない」ということである。

— 12 —

なる質の授業の「法則」であろうか。では、心理学研究者が「授業」の法則として求めるのは、いか

めの法則、そのいずれであろうか。則、だめな授業の法則、すぐれた授業とだめな授業を区別するたの授業に共通する法則、すぐれた授業の法則、平均的な授業の法則、とれから創るべき授業の法則、平均的な授業の法則、 研究者がたまたま研究対象とし現在多く見られる授業の法則、研究者がたまたま研究対象とし

て、「すぐれた授業」の法則の研究が全く欠落していたら、「授教育実践においては、質の高い授業が目ざされている。したが

過程の研究なしに、また、すぐれた作品への鑑識眼なしに、それとは知らずに駄作や失敗作が作られる過程だけを研究しているも、それを芸術創造の研究とは呼び難いであろうのと 同 様 である。だが、すぐれた授業の法則とは、すぐれた授業者が生かしているにせよしていないにせよ、すぐれた授業を創る 活 動 の 中で、生かしている法則であるにちがいない。こうして、授業の研究の最も中心的部分には、すぐれた授業を創る 活 動 の 中で、生かしている法則であるにちがいない。こうして、授業の研究の最も中心的部分には、すぐれた授業を創る 活 動 の 中で、生かしている法則であるにちがいない。こうして、授業の研究の最も中心的部分には、すぐれた授業を創る 活 動 の 中で、だめな授業の研究の中で明確化しようと追求しているものである。また、授業者たちはだめな授業をなくしていこうと努めである。また、授業者たちはだめな授業をなくしていこうと努めである。また、授業者たちはだめな授業をなくしていこうと努めである。また、授業者たちはだめな授業をなくしていこうと努めである。また、授業者たちはだめな授業をなくしていこうと努めである。

では、たとえば授業者の視点もとることができなければならない。

主た、現実の授業の大多数は、第三者としての研究者のいないまた、現実の授業の大多数は、第三者としての研究者のいないには、研究者は、大多数の授業に直接の影響力ところで行われている。研究者は、大多数の授業に直接の影響力ところで行われている。研究者は、大多数の授業に直接の影響力ところで行われている。研究者は、大多数の授業に直接の影響力ところで行われている。研究者は、単なる傍観者、客観的な第三者としての視点に限定されてはならず、授業者の視点からとらえた授業の点からいっても、研究者は、単なる傍観者、客観的な第三者としての視点に限定されてはならないことになる。

— 13 —

とることはいかにして可能であるか。だが、研究者が実践者・授業者の視点を、「観念的に」せよ、

ならないのである。 ならないのである。 ひとつの可能性は、研究者が、心理学的現実をとらえる三つので客観的認識」による接近に限定されすぎていたように思われてし、授業の創造過程を総合的にとらえることである。こう考えてし、授業の創造過程を総合的にとらえることである。こう考えてし、授業の創造過程を総合的にとらえることである。こう考えていると、これまでの研究者の授業研究は、どうも「外側から」の「客観的認識」による接近に限定されすぎていたように思われている。

し、ローレンツ、武谷など)による科学論や科学方法論と、科学に通じている哲学者(たとえば、エンゲルス、ポパーなど)による科学哲学。すぐれた作家であり同時に文学研究者でもあった漱る科学哲学。すぐれた作家であり同時に文学研究者でもあった漱る科学哲学。すぐれた作家であり同時に文学研究者でもあった漱る科学哲学。すぐれた作家であり同時に文学研究者でもあった漱る科学哲学。すぐれた科学者(たとえば、エンゲルス、ポパーなど)による芸術論と芸術評論家(たとえば、エンゲルス、ポパーなど)による映画論と、映画研究者(たとえば、アルンハイマコティン)による映画論と、映画研究者(たとえば、アルンハイマカ)による映画論。

である。 じかし、授業を授業者による「創造活動」としてとらえるのえる。しかし、授業を授業者による「創造活動」としてとらえる然現象」としてとらえるときには大きなちがいではないように見然現象」としてとらえるときには大きなちがいではないように見然現象」としてとらえるときには大きなちがいてはないように見ける投業を削造する授業者の立場からの授業研究(\*4)とすぐれた授業を創造する授業者の立場からの授業研究(\*4)と

- 14 -

#### これからの授業研究

なことを述べている。 アメリカの心理学者ブルーナーはある本の序文の中で次のよう

ていたことである」(\*5)。しかも、その時期の大部分の学習理理学』と呼ぶのはやや寛容にすぎる位のものに、奴隷的に依存しすなわち、一世代昔の教育心理学の性格はといえば、『学習心

らの学習課題が、学校での課題とはあまり似ていなくても、学校論は人工的な条件下での人工的課題に基づくものであった。それ 心の増大である。ブルーナーは、これらの要因により新しい性格子どもが自分自身の力を感じることのできるような諸条件への関 ことを子どもの学習の仕方にマッチさせることが最大の問題とない仕方・方略の出現である、という考え方。子どもが学習すべき は、現代言語学、ことに変形文法の発展、言語獲得の言語心理学 を大きく変えることになった。その第一は、コンピューターとコぎないとみなされていた。だが、次の四つの要因がそうした見方 での学習は、それらの課題の学習を典型例とする学習の累積にす の教育心理学が現れつつある、と指摘している。 心の増大である。ブルーナーは、これらの要因により新し った。そして第四に、人格理論で現れた新しい力点のおき方で、 とは、新しい反応や習慣の学習ではなくて、情報を処理する新し ととになった。第三は、発達心理学の分野での革命である。発達 とだとする見方が成立し、他の諸活動も同様の見方で研究される 者による研究である。言語の獲得が概念と規則をマスターすると 順序、カリキュラム、プログラムの重要性を教えてくれた。第二 ンピュー 人間のコンピテンス(現実の問題に対処していく能力)の発達、 ター 科学の出現である。それは、学習材料との出会いの

心理学にそのような変化が起とったとしても、それは、日本の教様の変化が遅かれ早かれ起とってくるであろう。だが日本の教育国の心理学の影響を最も強く受けている日本の教育心理学にも同国の教育心理学に新しい変化が起こりつつあるとすれば、米

重の意味で外在的な要因によるものである。間分野の動向、しかも、外国での動向に促がされたものという二宵心理学にとって内在的な要因による変化というよりは、他の学

について述べた次の文章が思い起こされる。とこで、かつて、大正の初めに芦田恵之助が綴り方教授の研究

「当今級り方教授の研究に二種の傾向がある。一は欧米に於ける斯道の「当今級り方教授の研究に二種の傾向がある。一は欧米に於ける斯道の所説が往々局部的でかつ散慢に流れていることがある。完全なる研究の所説が往々局部的でかつ散慢に流れていることがある。完全なる研究の所説が往々局部的でかつ散慢に流れていることがある。完全なる研究の所説が往々局部的でかつ散慢に流れていることがある。完全なる研究の所説が往々局部的でかつ散慢に流れていることがある。完全なる研究の所説が往々局部的でかつ散慢に流れていることがある。一は欧米に於ける斯道の「当今級り方教授の研究に二種の傾向がある。一は欧米に於ける斯道の「当今級り方教授の研究に二種の傾向がある。一は欧米に於ける斯道の「当今級り方教授の研究に二種の傾向がある。一は欧米に於ける斯道の「当个級り方教授の研究に一種の傾向がある。一は欧米に於ける斯道の「当个級り方教授の研究に一種の傾向がある。」

り出す道は、まだどこにもないのであろうか。しかできないのであろうか。日本の教育心理学が独自のものを創もまた、外国での別の分野での新しい進歩を輸入するだけのこと『学習心理学』に「奴隷的に依存」していた教育心理学は、今度

すぐれた授業実践の事実から学んで、授業の心理学的理論をつく「すぐれた授業」を創造する活動の現実を研究すること である。ことである。そのために重要なことは、日本の教育実践におけるは、芦田のいう「理想的の研究」を授業の研究において実現するその道の一つは授業研究の領域にある、と筆者は考える。それ

化学の方法で分析抽出して新薬をつくるように、すぐれた授業実 学ぶということを、たとえば、すぐれた漢方薬の有効成分を現代 証するというところまで進めていかなければならない。 し、さらにすぐれた実践を創り出し、そのことによって理論を検 はならない。もう一歩進めて、その創造の心理と論理を明らかに 践を心理学的に分析して「有効成分」を抽出するだけにとどめて るという仕事を始めることである。現実にあるすぐれたものから

そのような仕事とそを、 いまや始めるべきなのだと思う。

論』第15章、村上正治編訳、岩崎学術出版社、一九六七年。 \* ロージァズ・C『人間科学をめざして』ロージァズ全集12『人間

七ページ。 \* 2 拙著『授業の心理学をめざして』国土社、一九七五年、二一二~

一四ページ。 青山広志編『芦田恵之助先生綴方教室』文化評論出版、一九七三

\* 5 一九七〇年。斎藤喜博著『授業と教材解釈』一茎書房、一九七五年。 Farnham-Diggory, Sylvia: Cognitive Harper and Row, 1972. p. XIV. 斎藤喜博著『授業の展開・教育学のすすめ』 processes in educa-全集6、 国土社、

tion. \* 6 一〇八~九ページ。 芦田恵之助著『教式と教壇・綴り方教授』 明治図書、 一九七三

(東京大学助教授)

#### 補 説」について

値をさらに高めつつある。 
『教育学全集』全十五巻の刊行がスタートしたのは昭和四十二年の秋であれ、以来すでに八年の歳月が流れている。この間、わが国は、政治・経済り、以来すでに八年の歳月が流れている。この間、わが国は、政治・経済り、以来すでに八年の歳月が流れている。この間、わが国は、政治・経済り、以来すでに八年の歳月が流れている。この間、わが国は、政治・経済り、以来すでに八年の歳月が流れている。この間、わが国は、政治・経済

議、検討され、そして教育の実態にも変革がもたらされた事実を無視するしかし、この激動の年月に、幾つかの 新 しい 教育課題が提起され、論 論点を各巻のテーマに即して、編集委員の先生方を中心に補足解説してい ただいたのがこの「補説」である。 ととはできない。これらの課題に関する研究の成果をふまえ、その主要な

る本全集各巻の増補としての役割を果たすものである。は避けていただいた。したがって、この「補説」は、いわば現時点におけ が、論文の基本的な内容の改正は、本格的な改訂版の刊行を期して、今回 確さを期して、事実の修正や資料の加除等を御執筆の先生方にお願いした 本文においては、できるだけ現代に即することをめざし、いっそうの正

(昭和五〇年三月)

**—** 16 **—**